

# 赤郷遺跡発掘調査報告書

2011

鈴鹿市考古博物館

# 赤郷遺跡発掘調査報告書

# 例 言

- 1 本書は三重県鈴鹿市秋永町字赤郷 1823 番 2 外に所在する赤郷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 現地における発掘調査の期間は 1995 年 2 月 3 日から 4 月 18 日である。
- 3 試掘面積は 123.8㎡, 本調査面積は 146㎡である。
- 4 発掘調査は, 鈴鹿市遺跡調査会が受託した。
- 5 現地調査は新田が担当し, 山本・清山がこれを補佐した。
- 6 報告書作成時の体制は以下のとおりである。

鈴鹿市考古博物館

館長 東口 元

主幹兼埋蔵文化財 GL 新田 剛

副主幹 服部真佳

事務職員 田部剛士・吉田隆史・米川梨香

嘱託職員 吉田真由美・打田知之

臨時職員 加藤利恵・永戸久美子・前出みさ子・横内江里・市橋明子

- 7 本書の編集執筆は新田が行った。
- 8 本書所収の自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社による。
- 9 本書で使用した方位のうち磁北は MN で表示し, 真北は N で表示した。

# 目 次

I 調査に至る経緯	1	III 遺構と遺物	1
II 位置と歴史的環境	1	IV まとめ	6
1 位置	1	V 付編	11
2 歴史的環境	1	赤郷遺跡および近隣遺跡出土土器の胎土分析	13

# 挿 図

Fig.1 周辺の遺跡 1 : 50,000	2	Fig.7 SD01 土層断面図 (2) 1 : 40	6
Fig.2 調査区位置図 1 : 600	3	Fig.8 赤郷 2 号墳 1 : 80	7
Fig.3 位置図 1 : 25,000	5	Fig.9 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度	15
Fig.4 調査区 1 : 200	5	Fig.10 胎土中の砂の粒径組成	16
Fig.5 SD01 1 : 100	5	Fig.11 碎屑物・基質・孔隙の割合	17
Fig.6 SD01 土層断面図 (1) 1 : 40	6		

# 表

Tab.1 分析試料一覧および胎土分類結果	13	Tab.3 薄片観察結果 (2)	19
Tab.2 薄片観察結果 (1)	18	Tab.4 報告書抄録	巻末

# 図 版

Pl.1 作業風景 西から/土層断面 A 東から/土層断面 B 西から/SD01 完掘状況 西から/溝 SD01 東端 西から/調査区全景 西から/調査区全景 西から	Pl.2 胎土薄片 (1)
	Pl.3 胎土薄片 (2)
	Pl.4 胎土薄片 (3)
	Pl.5 胎土薄片 (4)

# I 調査に至る経緯

平成6年11月、鈴鹿市企画調整部調整課から鈴鹿市教育委員会文化財保護課に対し、市道秋永郡山線拡幅改良工事予定地における文化財の有無について照会があった。『鈴鹿市遺跡地図』によれば当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「赤郷遺跡」に含まれることから範囲確認のための試掘調査を実施することとした。開発区域が現道を含む9m×576mの狭隘な形状となるため試掘調査には、拡幅部分となる畑地・山林において幅1mのトレンチを可能な限り連続して設定する方法をとった。試掘調査の結果、遺構・遺物が検出された地点については本調査の対象とし記録保存に止めることとした。また、当調査区に近接する赤郷2号墳に関連する遺構の検出に備え、同古墳の地形測量を実施した。

## II 位置と歴史的環境

### 1 位置

調査地点は、鈴鹿市立天栄中学校の東から南をとおり郡山町方面へ向かう幅員約5mの市道秋永郡山線沿いに位置する。周知の埋蔵文化財包蔵地「赤郷遺跡」の推定範囲は天栄中学校の南辺から中瀬古町集落までの間約8万㎡と考えられ、弥生時代から鎌倉時代までの遺跡として知られている。遺跡の北東には赤郷2号墳が現存する。地形的には中ノ川右岸に形成された段丘の縁辺近くに位置し、標高は約13mで、中ノ川との比高差は約9mである。調査地点付近の地表面は黄灰褐色砂礫混じりの土壌で、通常見られる黄褐色粘質土の風化土壌が流出したものと思われる。

### 2 歴史的環境

当遺跡を乗せる中ノ川流域の台地は北の鈴鹿川同様密集した遺跡の分布が見られるところである。本遺跡に関わりの深い弥生時代の遺跡や古墳を中心に概観しておきたい。

縄文時代よりも古い遺跡は、中ノ川の北に併行して流れる堀切川とその小支流・祓山川に挟まれた台地を中心として分布することが知られるが、包含層がすでに失われてしまったものが多く、その結果遺物のみが採集され遺跡として認知されている。調査例としては寺谷古墳群で遊離遺物として出土したナイフ形石器や剥片類が知られる。縄文時代についても採集された石器などの遺物により遺跡の存在が知られている。縄文時代の遺構が検出

された遺跡には西川遺跡・末野A・西条遺跡などがある。いずれも竪穴住居が1～2棟検出された小規模な集落遺跡と考えられる。

中ノ川流域における弥生時代の遺跡としては段丘上や丘陵部を中心に分布が知られる。外縁付鈕式銅鐸が明治の初めに出土した磯山町字黒丸は浜堤もしくは自然堤防上にあたり、付近では今のところ集落遺跡の調査は行われていない。稲生山丘陵の南谷遺跡は弥生後期の遺跡で、断面がV字状の濠が検出され、鉄鏃が出土した。

古墳時代では、当遺跡に隣接する赤郷1号墳から出土したとされる三角縁神獸鏡（鈴鹿市指定文化財）が特筆される。古墳自体はすでに失われており、同じく当遺跡に隣接する赤郷2号墳は痕跡のみ残る前方後円墳とされてきたが、後述のとおり異なる墳形であった可能性も考えられる。

同流域で後続する古墳としては、帆立貝式の前方後円墳である経塚古墳がある。全長35.7mで、粘土槨による主体部を有し、鉄剣・鉄刀・鉄鏃などの豊富な副葬品が出土した。五世紀初頭の築造と報告されているが、出土した円筒埴輪はより後出のもので、5世紀後半代以降の可能性もある。確実に五世紀半ば以前に遡る古墳は左岸丘陵部の高所で調査された西高山1号墳である。直径30mの円墳で、黒斑付きの埴輪を有し、かつては漢式鏡や直刀が出土しているという。右岸の石塚遺跡では埴輪編年Ⅲ期に遡る埴輪の製作遺構が検出されており、供給された古墳の発見が待たれるところである。

5世紀末以降では寺谷古墳群や西高山2号墳などが調査されている。寺谷古墳群では、円墳・方墳合わせて20基が調査され、形象埴輪を含む豊富な埴輪類や須恵器などが出土している。西高山2号墳は全長25.5mの前方後円墳で、5世紀末の築造と見られる。その他未調査ではあるが茶白山古墳群や大野古墳群などの群集墳が知られる。茶白山1号墳は径53mの円墳で、中ノ川流域では最大の規模を有する。

## III 遺構と遺物

弥生時代後期ないしは古墳時代前期の溝と近世以降のものと考えられる溝・柱穴が検出された。

溝SD01 東西方向の溝で、弥生時代後期ないしは古墳時代前期の埋没が考えられる。幅120～135cm・深さ35～50cmで、長さ12mに亘って検出された。第1層と第2層の間にやや不整合が認められる以外は、連続的に堆積している。土器片が出土したが、



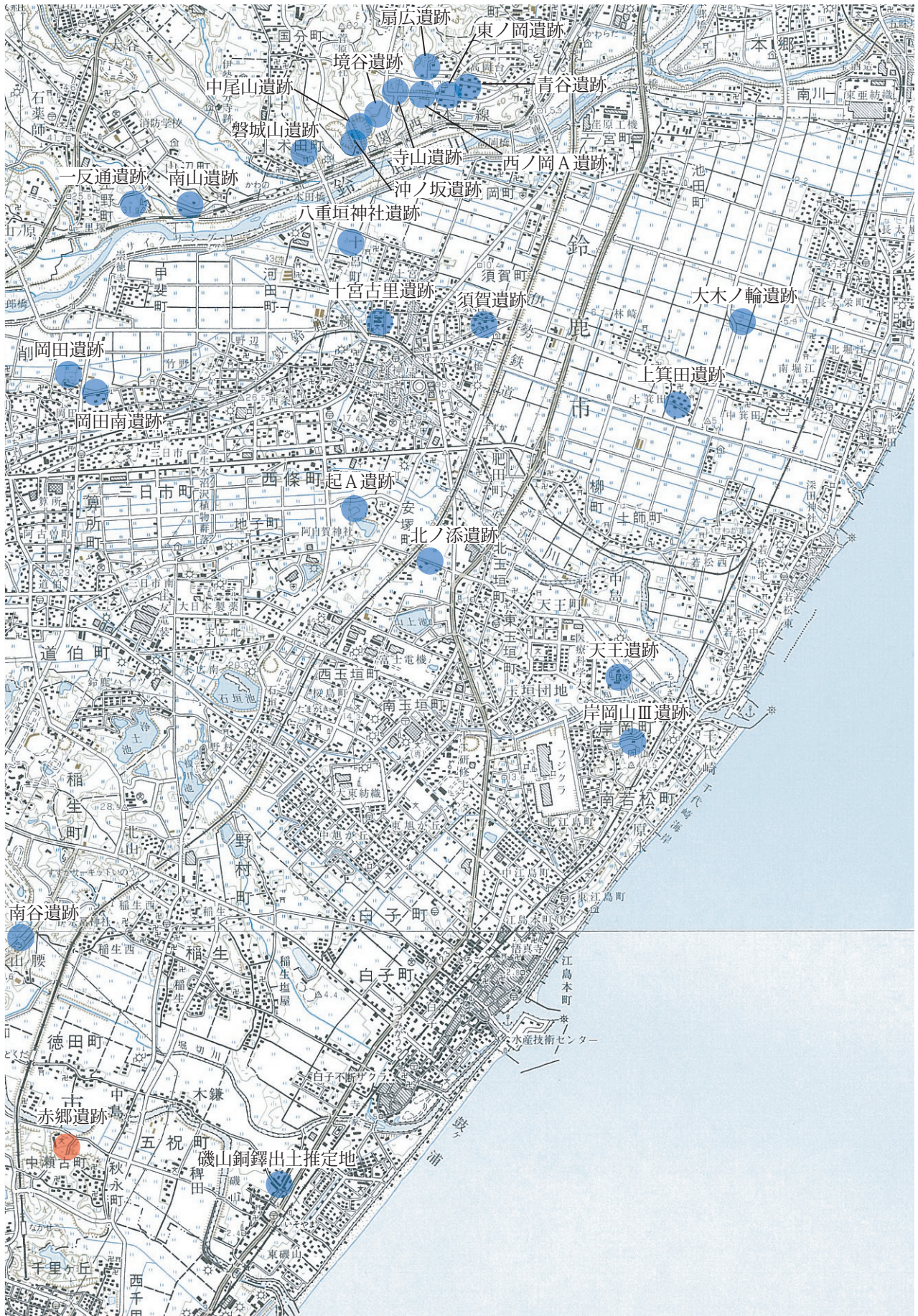


Fig.1 周辺の遺跡 1 : 50,000 国土地理院 5 万分の 1 地形図「四日市」・「津東部」を使用





Fig.2 調査区位置図 1 : 600



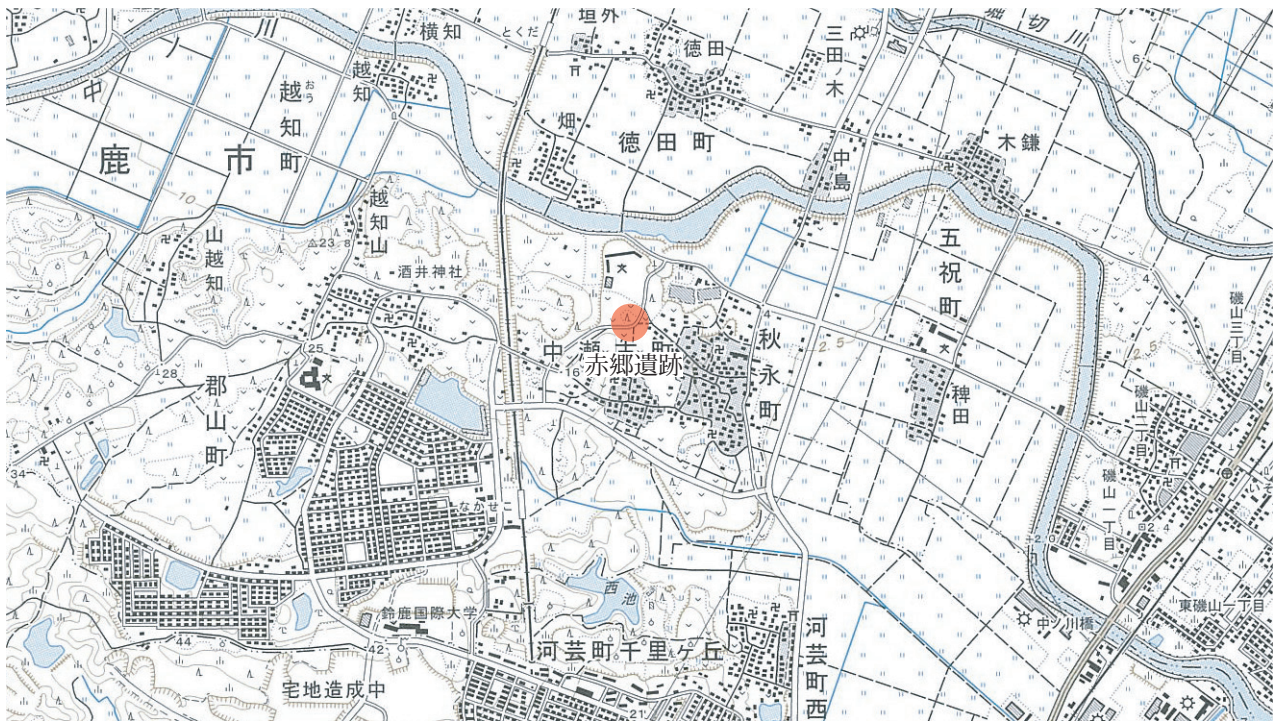


Fig.3 位置図 1 : 25,000 国土地理院 2万 5 千分の 1

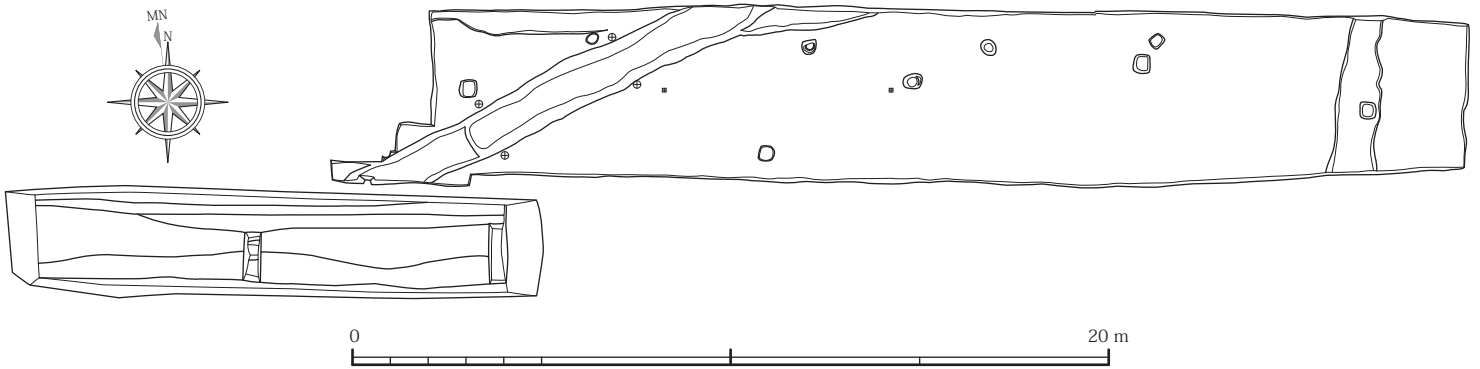


Fig.4 調査区 1 : 200

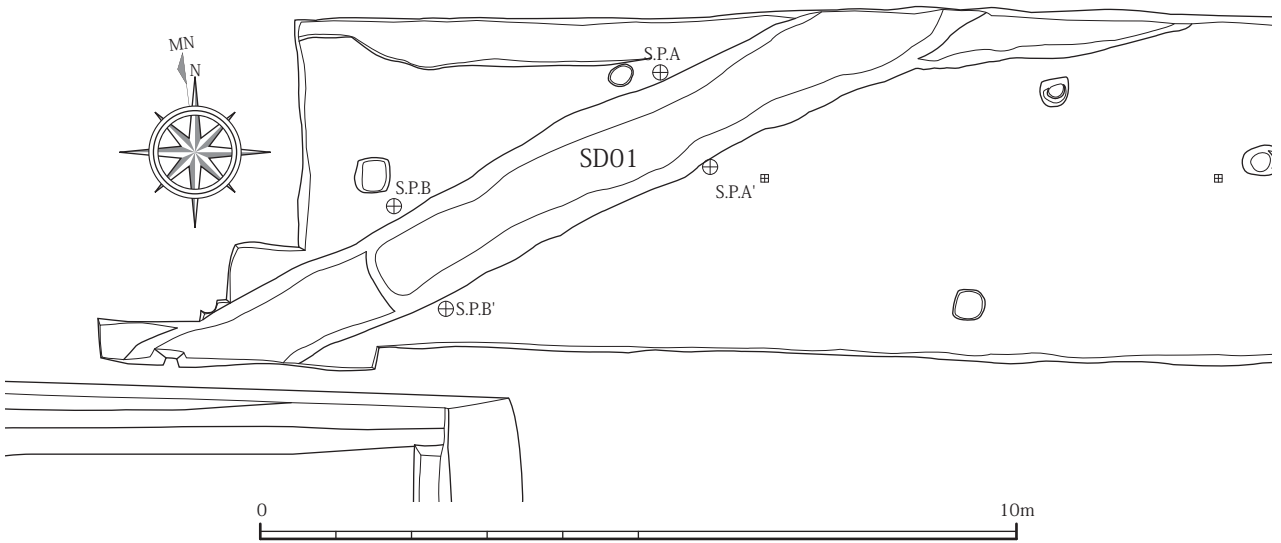
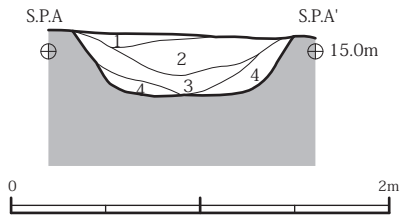
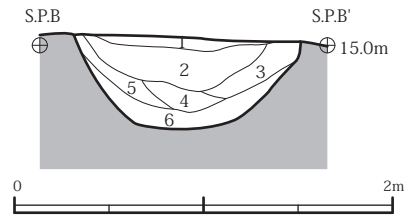


Fig.5 SD01 1 : 100



- 1 10YR4/2 灰褐色シルト。マンガン粒・FeO<sub>2</sub> 含む。炭化物含む。2mm砂粒やや多い。
- 2 7.5YR4/4 褐色シルト。マンガン粒・FeO<sub>2</sub> 含む。0.5～2mm含む。
- 3 10YR5/6 明褐色シルト。粘性少ない。マンガン粒少し含む。FeO<sub>2</sub> やや多い。0.5～2mm砂礫含む
- 4 10YR4/4 褐色シルト。やや粘性高い。

Fig.6 SD01 土層断面図 (1) 1:40



- 1 7.5YR4/2 灰褐色シルト。マンガン鉄分含む。2～10mm砂礫多い。
- 2 7.5YR4/4 褐色シルト。マンガン粒多い。FeO<sub>2</sub> 含む。
- 3 10YR6/6 明黄褐色シルト。粘性高い。マンガン粒・FeO<sub>2</sub> 含む。
- 4 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト。2～50mm砂礫多く含む。マンガン粒・FeO<sub>2</sub> 含む。
- 5 10YR5/6 黄褐色シルト。
- 6 7.5YR4/6 にぶい橙色シルト。炭化物含む。FeO<sub>2</sub> 多く含む。マンガン粒少し含む。

Fig.7 SD01 土層断面図 (2) 1:40

実測可能な個体は無く、詳細な時期は確定しがたい。

## IV まとめ

決して残りが良いとは云えないが、弥生時代後期ないしは古墳時代前期における集落の存在が明らかとなった。検出された溝は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて各地で見られる濠の一部であろう。環状となるかあるいは台地を直線的に分断するものなのかは不明である。

当該期における同種の溝には断面形状がV字形のもの(A類)と逆台形のもの(B類)がある。近隣では、A類として南谷遺跡・天王遺跡、B類として一反通遺跡・南山遺跡・磐城山遺跡・十宮古里遺跡に例が知られる。赤郷遺跡のものは上層が大きく削平されている可能性が高いが、B類と判断される。通常これらの溝は集落の防御に関わるものと考えられている。個々の遺跡におけるあり方にも断面形状とは別にいくつかの類型が考えられるが、当地域では集落の全貌がわかる調査例に乏しい。南谷遺跡では丘陵頂部に竪穴住居があり、その東に延びる尾根を分断するように3条の溝が掘られている。一方、岸岡山丘陵北の低位段丘上に立地する天王遺跡では、環状に廻ることがわかっている。つまり、急斜面に囲まれた遺跡では尾根などの侵入路を断つ位置に溝が掘られ、周囲が開けた集落では環状となっている。

当遺跡の全貌は知る由もないが、立地からすれば、ある程度環状を呈することが予想される。遺物の出土料が非常に乏しいのは、通常この種の溝に多くの土器類が廃棄されている状況と比べれば、大きな特色であると云える。おそらくは、中心的な居住域から離れた位置に今回の調査区が位置するためであろう。

近隣遺跡における土器胎土の比較結果は付編のとおりである。限られた範囲の土器ということもあって、胎土に含まれる岩石片・鋳物片の種類構成はいずれも大差がなかったが、赤郷遺跡と同じ中ノ川流域に属する南谷遺跡の試料には凝灰岩の量比に特色が認められた。両遺跡の試料は粒径において他と区別できる分析結果が得られており、原材や混和剤の採取において共通性を有していた可能性がある。

今回の調査に先立って実施した赤郷2号墳の測量結果はFig.8のとおりである。南北15mで、現存する墳丘が本来の形状を保っているとすれば、前方後方墳である可能性が考えられる。当古墳が前方後方墳であると仮定したとき、後方部は南北11m・東西10m、前方部は南北4m・東西5m、後方部の高さ2m、前方部の高さ1mである。出土遺物はこれまで知られていないが、北端付近の崩壊部分には土師質の土器細片が認められ、古墳時代前期に遡る可能性が示唆される。三角縁神獣鏡が出土したと伝わる地点(赤郷2号墳)は至近に位置しており、当遺跡が古墳時代前期における中ノ川右岸の拠点的な地位を占めていたことが推察される。

### 参考文献

- 小管文裕ほか 1995『南谷遺跡・稲生遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
- 真田幸成 1966『経塚古墳』『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』鈴鹿市教育委員会
- 中森成行 1983『郡山遺跡群発掘調査報告I』鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会
- 中森成行 2003「長畑遺跡」『鈴鹿市考古博物館年報』第4号
- 新田剛 1992『南谷遺跡』鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会
- 藤原秀樹 1994「石塚埴輪製作遺跡について」『第4回鈴鹿市埋蔵文化財展～最近の調査から～』鈴鹿市教育委員会



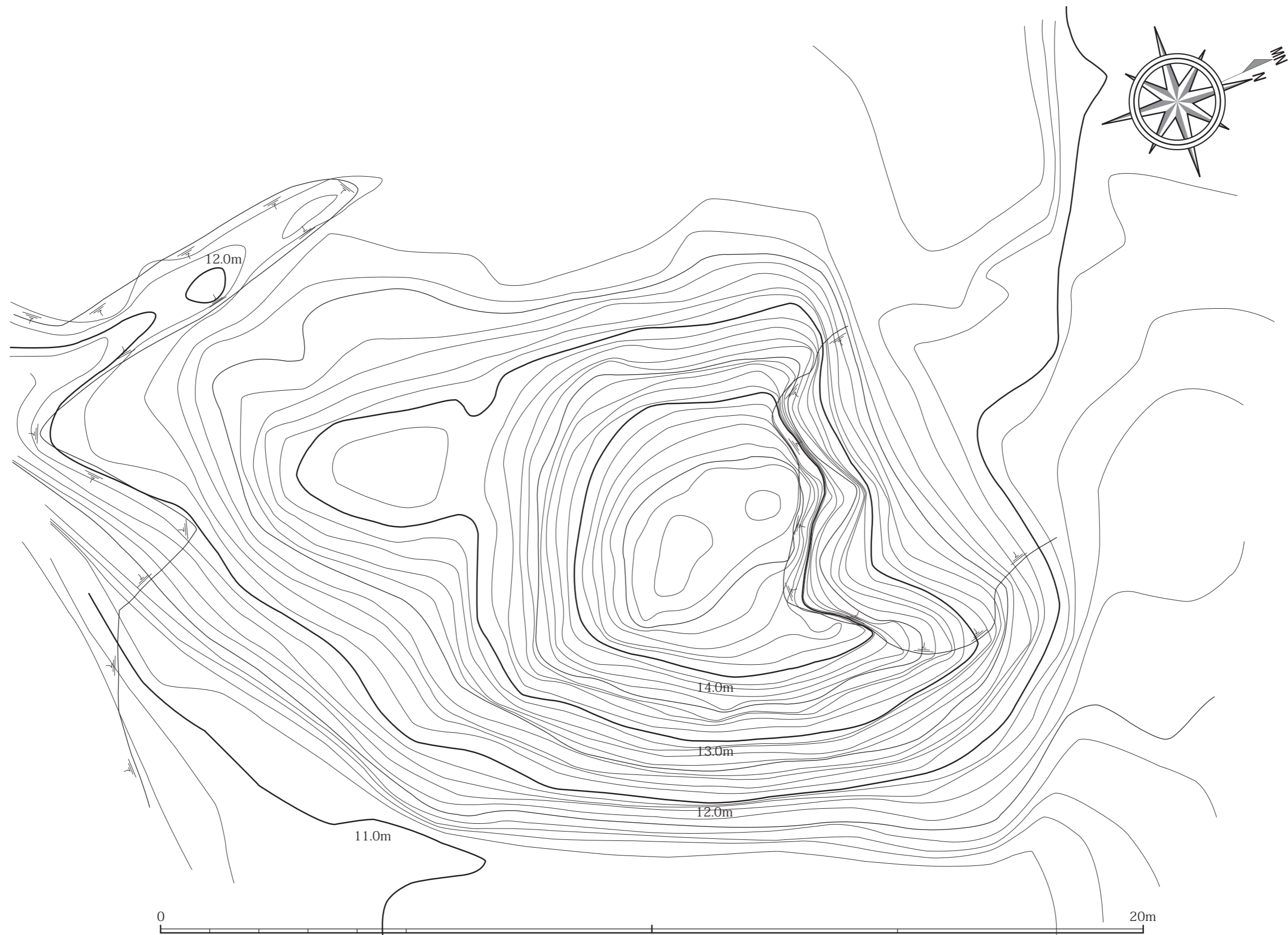


Fig.8 赤郷 2 号墳 1 : 80





作業風景 西から



溝 SD01 東端 西から



土層断面 A 東から



調査区全景 西から



土層断面 B 西から



SD01 完掘状況 西から



調査区全景 西から



## 付 編





# V 赤郷遺跡および近隣遺跡 出土土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## 1 はじめに

鈴鹿市内の伊勢平野北部には、弥生時代後期から古墳時代前期とされる遺跡が多く確認されている。鈴鹿市秋永町に所在する赤郷遺跡もその一つである。それらの遺跡から出土する土器の研究は、伊勢平野における同時期の動向を知る重要な手がかりともされている。本報告では、赤郷遺跡および鈴鹿市内の伊勢平野に分布する赤郷遺跡とほぼ同時期もしくは近接する時期とされる遺跡から出土した土器の材質すなわち胎土の特性を捉えることにより、伊勢平野の地質との比較および遺跡出土試料間の比較を行い、その製作や遺跡間に関係などに係わる資料を作成する。

## 2 試料

試料は、鈴鹿市内に所在する遺跡から出土した土器片合計 11 点である。試料の出土した遺跡は赤郷・南谷・岸岡山Ⅲ・天王・十宮古里・磐城山・南山・一反通・沖ノ坂・須賀の各遺跡であり、南山遺跡出土試料は 2 点、他の遺跡出土試料は各 1 点ずつである。試料には上記遺跡の順に試料番号 1～11 までが付されている。南山遺跡試料は試料番号 7 および 8 である。

試料の時期は弥生時代後期から古墳時代前期にわたる。器種は南谷遺跡出土試料のみ壺であり、他は全て高坏である。

各遺跡の所在地および各試料の出土遺構などを一覧にして Tab.1 に示す。

Tab.1 分析試料一覧および胎土分類結果

試料番号	遺跡名	所在地 (鈴鹿市内)	立地	時期	器種	遺構	胎土		
							岩石鉱物	砂量	粒径
1	赤郷	秋永町	中ノ川右岸段丘	弥生後期～古墳前期	高坏	溝	A	b	1
2	南谷	稲生町	中ノ川左岸丘陵	弥生後期	壺	竪穴住居	A'	b	1
3	岸岡山Ⅲ	岸岡町	田古知川右岸丘陵	弥生後期	高坏	竪穴住居	A	a	2
4	天王	岸岡町	田古知川左岸段丘	弥生後期	高坏	溝	A	a	2'
5	十宮古里	十宮四丁目	鈴鹿川右岸段丘	古墳前期	高坏	溝	A	c	2
6	磐城山	木田町	鈴鹿川左岸段丘	弥生後期	高坏	溝	A	b	2
7	南山	河田町	鈴鹿川左岸段丘	弥生後期	高坏	墳丘墓	A	b	2
8	南山	河田町	鈴鹿川左岸段丘	弥生後期	高坏	溝	A	c	3
9	一反通	上野町	鈴鹿川左岸段丘	弥生後期	高坏	溝	A	a	2
10	沖ノ坂	国分町	鈴鹿川左岸段丘	弥生後期	高坏	竪穴住居	A	b	2
11	須賀	矢橋三丁目	鈴鹿川右岸沖積低地	弥生後期	高坏	包含層	A	b	2

## 3 分析方法

胎土分析には現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者では粉碎による重鉱物分析や切片による薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。前者の方法は、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点があり、その中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか(1999)の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて 0.5mm 間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径 0.5mm 以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒

度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

#### 4 結果

観察結果を Tab. 2・3, Fig.9～11 に示す。各試料で計数された鉱物片および岩石片の種類構成は、ほぼ同様であり、大きく異なる試料は認められない。すなわち、鉱物片では石英が最も多く、次いで斜長石が多く、少量のカリ長石を伴っている。また、試料によっては微量の角閃石、白雲母、黒雲母などが含まれる。岩石片ではチャートと多結晶石英および花崗岩類を主体とする組成である。多結晶石英は、鏡下の観察から、ほとんどが花崗岩類の岩石片に由来すると考えられる。また、試料番号2には少量、試料番号11には微量の凝灰岩が含まれる。さらに試料によっては微量の火山ガラスなども含まれる。

碎屑物・基質・孔隙の量比では、碎屑物の量比を見ると試料によって10%前後から30%まで様々である。詳細に見れば、15%未満の試料が3点、15%以上25%未満の試料が最も多く6点あり、25%以上の試料は2点である。

各試料の粒径組成をみると、極細粒砂をモードとする試料が多く、8点を占める。残る3点のうち、2点は中粒砂をモードとし、1点は粗粒シルトをモードとする。以上述べた鉱物・岩石組成と碎屑物・基質・孔隙の量比および粒径組成の状況を整理して、ここでは以下に示すような分類を設定した。

##### a) 鉱物片・岩石片の種類構成

上述したように、今回の試料では、鉱物片・岩石片の種類構成に違いはほとんど認められない。その中で、試料番号2については、凝灰岩の量比が他の試料に比べてやや多いことから、区別をしておく。すなわち、今回の試料の鉱物片・岩石片の種類構成をA類とするならば、試料番号2についてはA'類とする。

##### b) 碎屑物の量比

a類:15%未満

b類:15%以上25%未満

c類:25%以上

##### c) 粒径組成

1類:中粒砂をモードとする。

2類:極細粒砂をモードとする。ただし、試料番号4では、中粒砂に第2のピークが認められることから、これを2'類とする。

3類:粗粒シルトをモードとする。

上記分類基準に従って各試料の胎土を分類した結果を Tab.1 に併記する。遺跡の所在地別でみると、その状況は以下の通りである。

##### 1) 中ノ川流域(赤郷遺跡・南谷遺跡)

鉱物片・岩石片の種類構成では、赤郷遺跡の試料番号1はA類、南谷遺跡の試料番号2は今回の試料で唯一のA'類を示す。碎屑物の量比では、ともにb類であり、粒径組成では、ともに1類である。

##### 2) 田古知川流域(岸岡山Ⅲ遺跡・天王遺跡)

鉱物片・岩石片の種類構成は、ともにA類であり、碎屑物の量比はともにa類である。粒径組成では、岸岡山Ⅲ遺跡の試料番号3は2類であるが、天王遺跡の試料番号4は、今回の試料で唯一の2'類を示す。

##### 3) 鈴鹿川右岸(十宮古里遺跡・須賀遺跡)

鉱物片・岩石片の種類構成は、ともにA類であり、碎屑物の量比は、十宮古里遺跡の試料番号5がc類、須賀遺跡の試料番号11はb類である。粒径組成では、ともに2類である。

##### 4) 鈴鹿川左岸(磐城山遺跡・南山遺跡・一反通遺跡・沖ノ坂遺跡)

鉱物片・岩石片の種類構成は全点A類である。碎屑物の量比は、磐城山遺跡の試料番号6、南山遺跡の試料番号7および沖ノ坂遺跡の試料番号10の3点がb類であり、南山遺跡の試料番号8はc類、一反通遺跡の試料番号9はa類である。粒径組成では、南山遺跡の試料番号8が今回の試料では唯一の3類を示すが、他の試料はいずれも2類である。

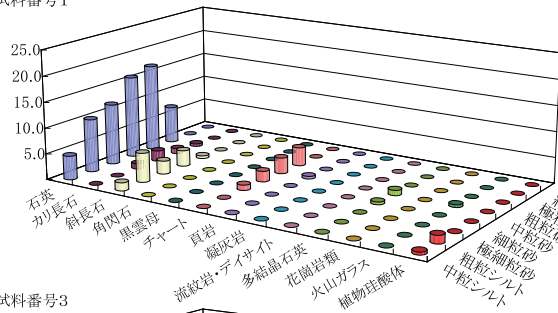
#### 5 考察

##### (1) 胎土から推定される地質学的背景とその地域性

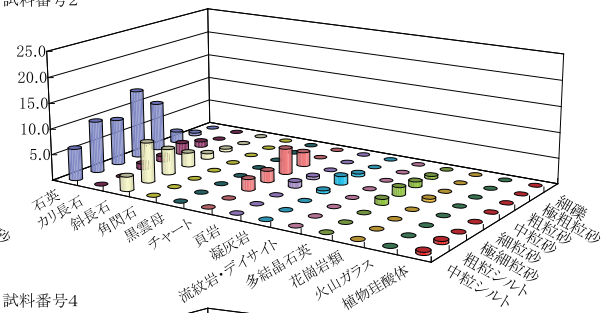
土器胎土中に含まれる鉱物片と岩石片の組成は、土器の材料となった粘土や砂が採取された場所の地質学的背景を示唆している。今回の試料の胎土では、全ての試料において、チャートと花崗岩類を主体とする岩石片の組成が認められたことから、いずれの試料も、チャートと花崗岩類の分布する地質を背景とする地域の堆積物を材料としていると考えられる。

ここで、鈴鹿市の位置する伊勢平野北部およびその背後の地質を、山田ほか(1981)、宮村ほか(1981)、吉田(1984;1987)などにより概観すると、平野を構成する沖積低地と段丘は第四紀の完新世および後期更新世の砂礫層・砂泥層からなり、平野に分布する丘陵は、新第三紀鮮新世～第四紀更新世前期に堆積した奄芸層群と呼ばれ

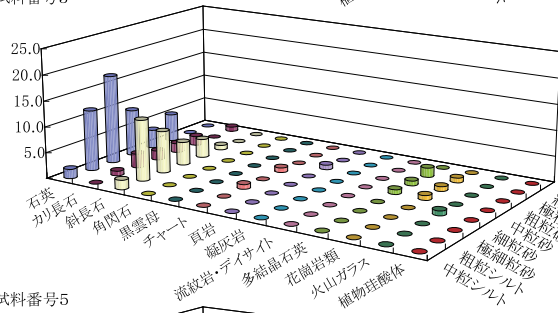
試料番号1



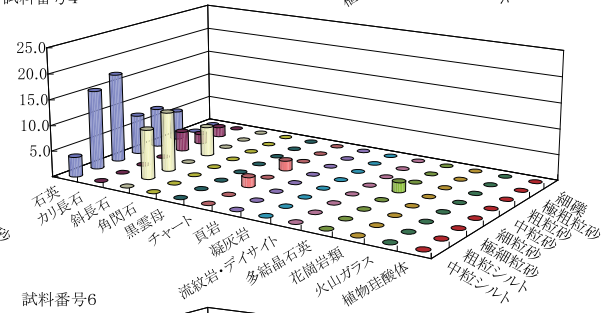
試料番号2



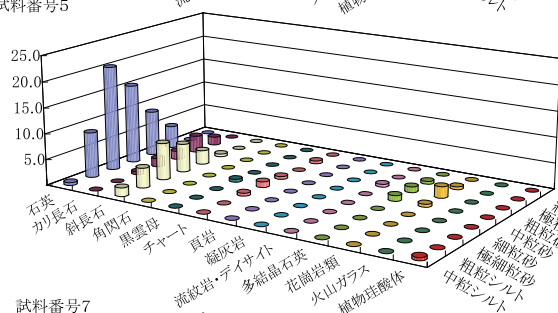
試料番号3



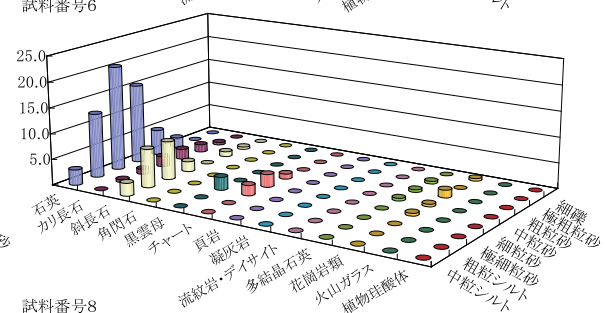
試料番号4



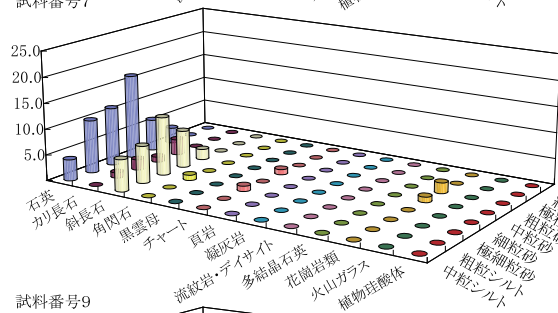
試料番号5



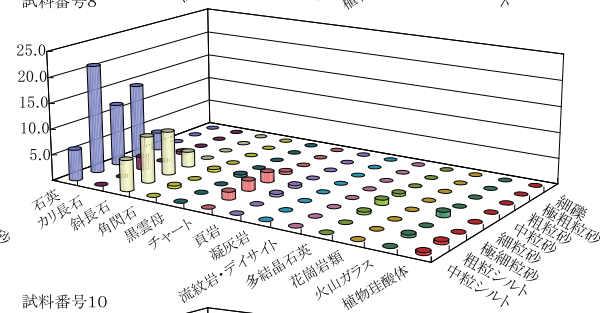
試料番号6



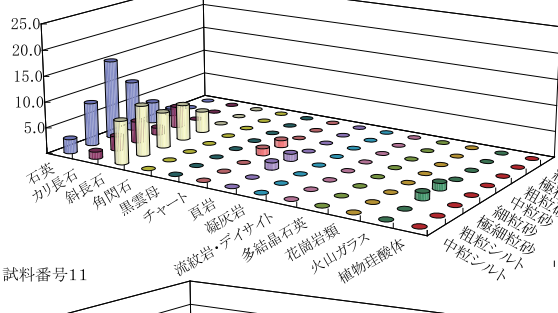
試料番号7



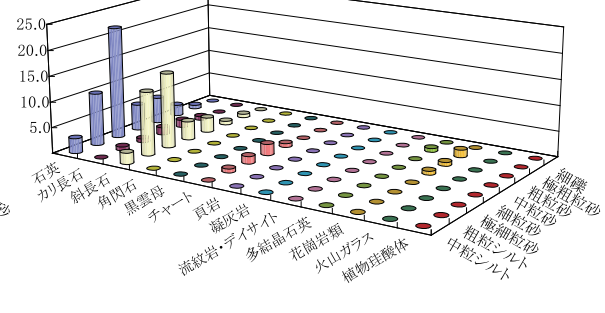
試料番号8



試料番号9



試料番号10



試料番号11

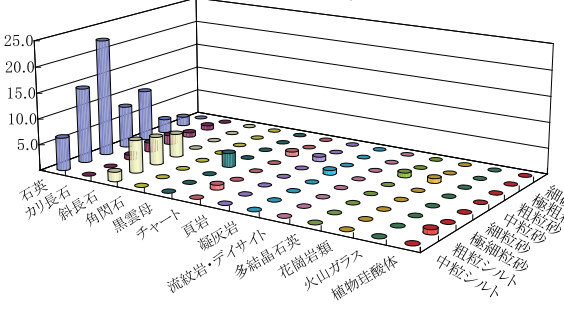


Fig.9 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

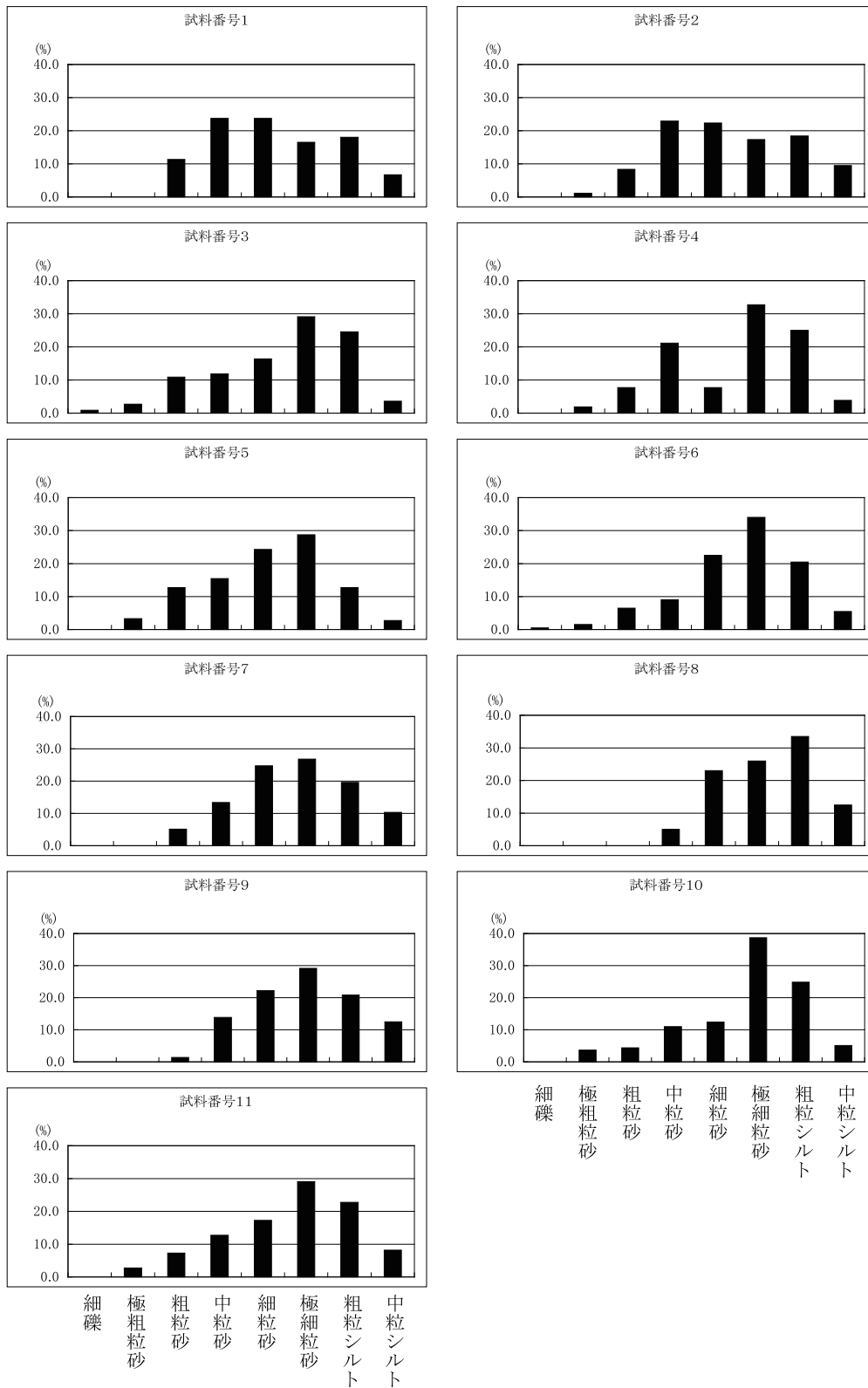


Fig.10 胎土中の砂の粒径組成



る砂礫層により構成されている。その背後の鈴鹿山地は、美濃帯と呼ばれる古生代二畳紀の堆積岩類（チャート、砂岩、石灰岩など）とそれに貫入した白亜紀後期の鈴鹿花崗岩により構成されている。また、鈴鹿川およびその水系の上流地域には、新第三紀中新世の堆積岩類からなる鈴鹿層群が分布している。これらのうち、新第三紀や第四紀の地質を構成する碎屑物は、鈴鹿山地を構成する美濃帯と鈴鹿花崗岩に由来するから、岩石片の種類でみれば、物理的に強いチャートの岩石片や花崗岩類の岩石片が相対的に多くを占めることになる。なお、A'類の特徴とした凝灰岩については、上述した伊勢平野北部背後の地質の中では、特にその分布域は記載されていない。ただし、鈴鹿層群を構成する礫層の礫種の中に「石英斑岩」とされる礫があり、これは溶結凝灰岩のこととする記載がある（宮村ほか,1981）ことから、おそらくA'類の凝灰岩は、これに由来する可能性がある。また、試料によって微量ふくまれる火山ガラスは、奄芸層群中に多数挟まれている火山灰層（吉田,1984）に由来すると考えられる。

以上に述べたことから、今回の試料の胎土の鉱物・岩石片の種類構成は、伊勢平野北部の地質学的背景とよく一致すると言える。すなわち、いずれの試料も伊勢平野北部という範囲での在地の土器であることが確認される。なお、発掘調査所見では、今回の試料の中には、伊勢平野中部雲出川流域からの搬入品も混在する可能性が指摘されているが、雲出川流域に分布する主な地質は、白亜紀の片麻岩などからなる領家変成岩と花崗岩類からなる領家深成岩類であり、堆積岩類からなる美濃帯は分布しない。したがって、今回の試料の中には、雲出川流

域からの搬入品がある可能性は低い。

(2) 伊勢平野北部内における弥生土器・土師器の地域性

今回の試料では、鉱物片・岩石片の種類構成による遺跡間の差異を見出すことはできない。これは、上述したように、いずれの試料も同一の地質学的背景を有する伊勢平野北部で作られた土器であると考えられることによる。ただし、今後分析例が増えた場合にA'類の出現状況次第では、A'類に伊勢平野北部内での地域性を有する可能性は生ずるかも知れない。しかし、現状では、鉱物片・岩石片の種類構成ではなく、胎土中の碎屑物量比と粒径組成による比較が有効であると考えられる。

結果の項で述べた胎土分類のうち、碎屑物の量比と粒径組成の分類を合わせてa1類のように表記すると、中ノ川流域の土器はb1類、田古知川流域の土器はa2類およびa2'類で特徴付けられる。これらに対して、鈴鹿川流域の弥生土器は、b2類が主体であり、これにc2類およびc3類といったc類の土器が混在し、さらに少数の土器として田古知川流域でも見られたa2類の土器が含まれるという特徴を見出すことができる。

この結果は、各遺跡から出土した土器1点の試料に基づくものであり、その地域性をより明確にするためには、さらに多くの分析事例を蓄積する必要がある。実際に今回の分析でも、南山遺跡出土試料2点間で異なった胎土が示されている。多数の分析事例から、各遺跡における胎土分類の傾向が把握され、さらに、遺跡の分布する地域性も胎土分類の傾向から把握することができれば、伊勢平野北部における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての動向に係わる資料の作成も期待される。

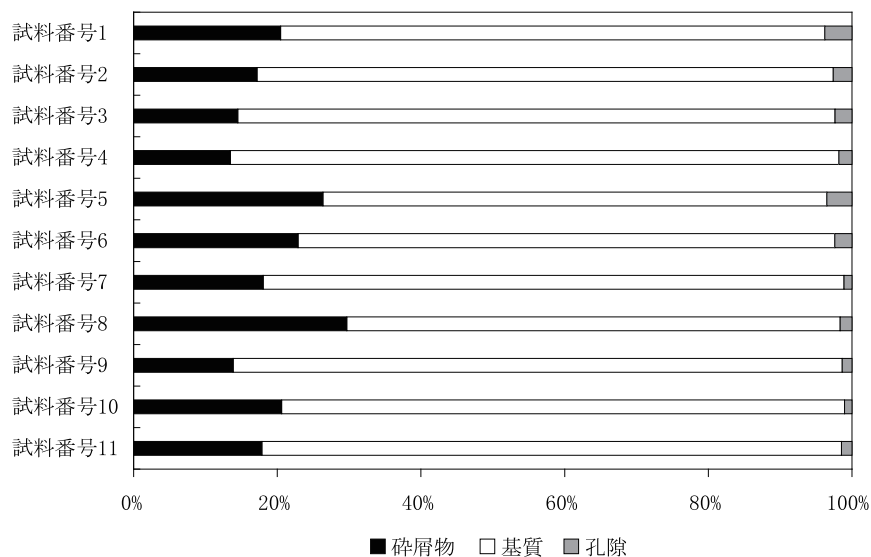


Fig.11 碎屑物・基質・孔隙の割合

Tab.2 薄片観察結果(1)

試料	砂粒区分	砂粒の種類構成														合計			
		鉱物片							岩石片					その他					
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英		花崗岩類	珪長岩	火山ガラス
1	砂	細礫																	0
		極粗粒砂																	0
		粗粒砂	14	1						7									22
		中粒砂	33	2	1					6	1			2				1	46
		細粒砂	31	4	6					4				1					46
		極細粒砂	23	2	5					2									32
		粗粒シルト	20		11				1										35
		中粒シルト	9		3													1	13
	基質																		719
	孔隙																		36
2	砂	細礫																	0
		極粗粒砂	1											1					2
		粗粒砂	4	2	1					5			1	2					15
		中粒砂	17	4	2					9	1	1	3	3	1				41
		細粒砂	24	2	5					4	2		1	2					40
		極細粒砂	16	2	9					4									31
		粗粒シルト	18		14													1	33
		中粒シルト	11		5													1	17
	基質																		836
	孔隙																		27
3	砂	細礫		1															1
		極粗粒砂												2	1				3
		粗粒砂	6	2	1									1	1				12
		中粒砂	4	2	4					1				1	1				13
		細粒砂	10	2	5													1	18
		極細粒砂	19	3	9					1									32
		粗粒シルト	13	1	13														27
		中粒シルト	2		2														4
	基質																		631
	孔隙																		18
4	砂	細礫																	0
		極粗粒砂		1															1
		粗粒砂	3	1															4
		中粒砂	4	2	3					1				1					11
		細粒砂	4																4
		極細粒砂	9		6		1			1									17
		粗粒シルト	8		5														13
		中粒シルト	2																2
	基質																		327
	孔隙																		7
5	砂	細礫																	0
		極粗粒砂		3						1				1	1				6
		粗粒砂	8	6	1								1	2	4	1			23
		中粒砂	16	3	5					1				2	1				28
		細粒砂	28	3	10			1		2									44
		極細粒砂	37	1	13					1									52
		粗粒シルト	16		7														23
		中粒シルト	1		3													1	5
	基質																		482
	孔隙																		24
6	砂	細礫													1				1
		極粗粒砂		1	1									1					3
		粗粒砂	4	3	2									1	3				13
		中粒砂	10	4						2				1	1				18
		細粒砂	31	4	4					5					1				45
		極細粒砂	41	2	15		1	5		4									68
		粗粒シルト	25	1	15														41
		中粒シルト	6		5														11
	基質																		653
	孔隙																		21

Tab.3 薄片観察結果 (2)

試料	砂粒区分	砂粒の種類構成														合計			
		鉱物片								岩石片				その他					
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英		花崗岩類	珪長岩	火山ガラス
7	砂	細礫																	0
		極粗粒砂																	0
		粗粒砂	3												2				5
		中粒砂	6	3	2					1					1				13
		細粒砂	16	1	7														24
		極細粒砂	11	2	11	1				1									26
		粗粒シルト	10	1	7				1										19
		中粒シルト	4		6														10
	基質																		435
	孔隙																		6
8	砂	細礫																	0
		極粗粒砂																	0
		粗粒砂																	0
		中粒砂	7	1						1					1				10
		細粒砂	29		6	1		1		4	1				2			2	46
		極細粒砂	24	5	17					4	1				1				52
		粗粒シルト	42		18	1			1	3								1	67
		中粒シルト	12		12														25
	基質																		463
	孔隙																		11
9	砂	細礫																	0
		極粗粒砂																	0
		粗粒砂	1																1
		中粒砂	3	3	3					1									10
		細粒砂	7	1	5					1	1							1	16
		極細粒砂	11	3	5						1							1	21
		粗粒シルト	6	2	7														15
		中粒シルト	2	1	6														9
	基質																		441
	孔隙																		7
10	砂	細礫																	0
		極粗粒砂	1		1										1	2			5
		粗粒砂	3	1	1											1			6
		中粒砂	7	2	4					1						1			15
		細粒砂	7	2	5					3									17
		極細粒砂	30	1	20					2									53
		粗粒シルト	14	1	17				1	1									34
		中粒シルト	4		3														7
	基質																		521
	孔隙																		7
11	砂	細礫																	0
		極粗粒砂	2	1															3
		粗粒砂	3	1						1	1				1	1			8
		中粒砂	11	2								1							14
		細粒砂	9	2	5			3											19
		極細粒砂	25	1	6														32
		粗粒シルト	16		7					1								1	25
		中粒シルト	7		2														9
	基質																		497
	孔隙																		9



#### 引用文献

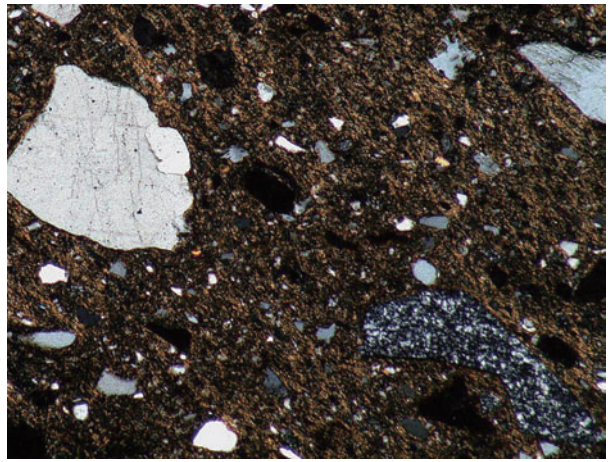
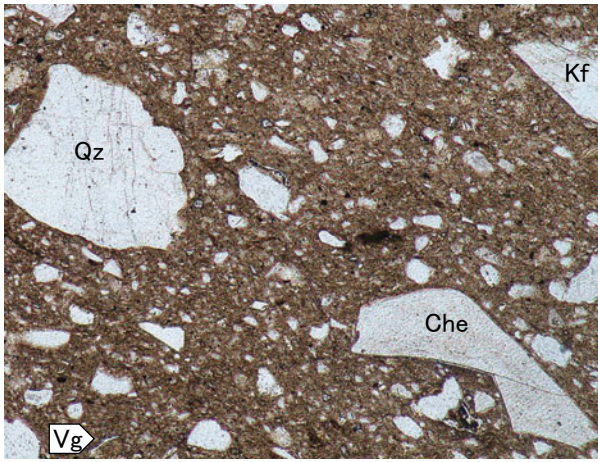
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－.日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.

宮村 学・吉田史郎・山田直利・佐藤岱生・寒川 旭,1981,亀山地域の地質.地域地質研究報告(5万分の1図幅),地質調査所,128p.

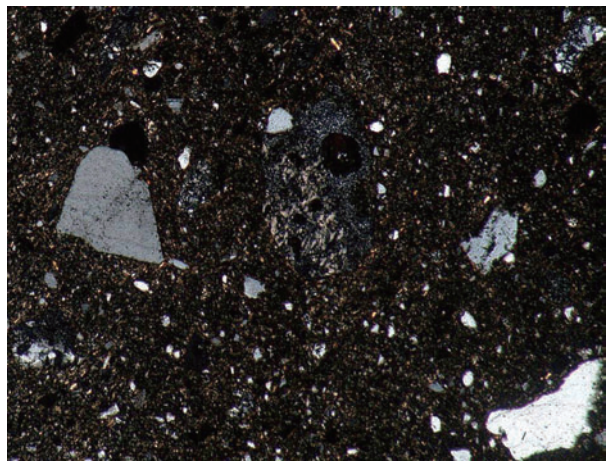
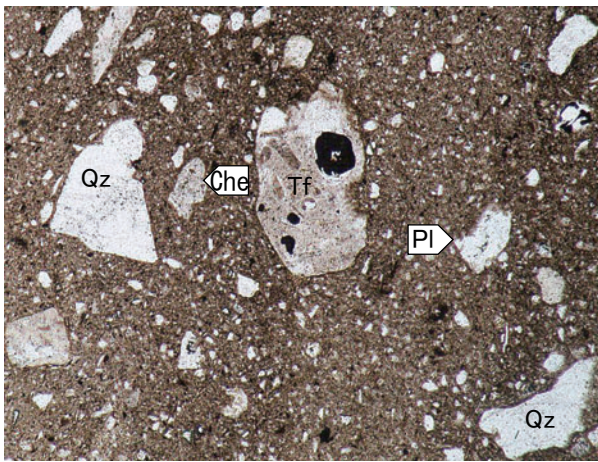
山田直利・宮村 学・吉田史郎・近藤善教・須田芳郎,1981,20万分の1地質図幅 名古屋(第2版),地質調査所.

吉田史郎,1984,四日市地域の地質.地域地質研究報告(5万分の1地質図幅),地質調査所,81p.

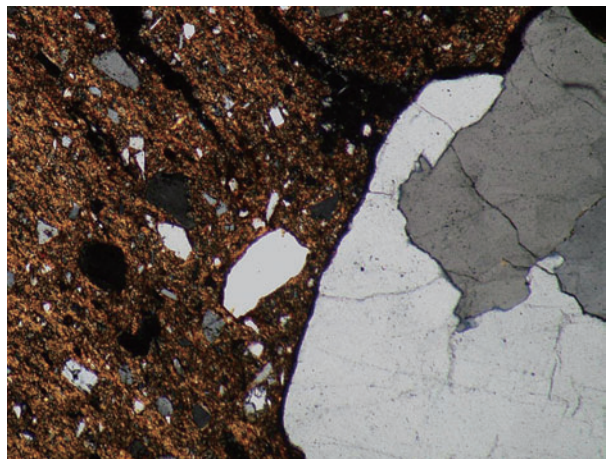
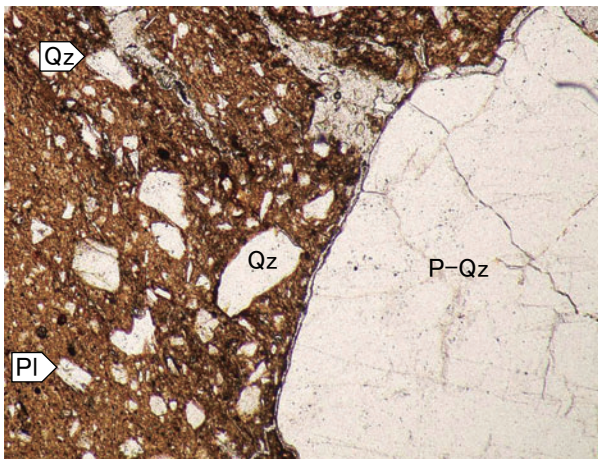
吉田史郎,1987,津東部地域の地質.地域地質研究報告(5万分の1地質図幅),地質調査所,72p.



1. 試料番号1 赤郷遺跡



2. 試料番号2 南谷遺跡



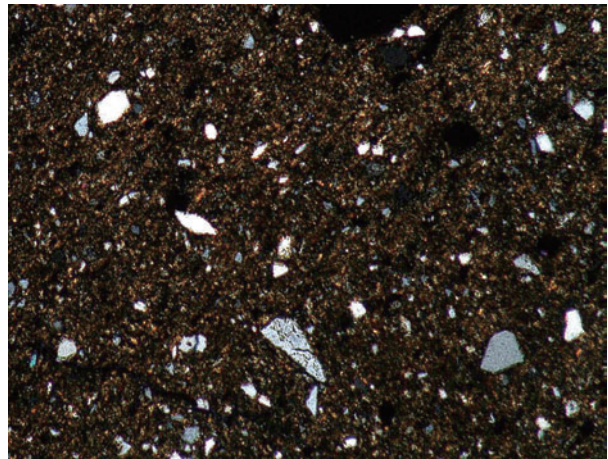
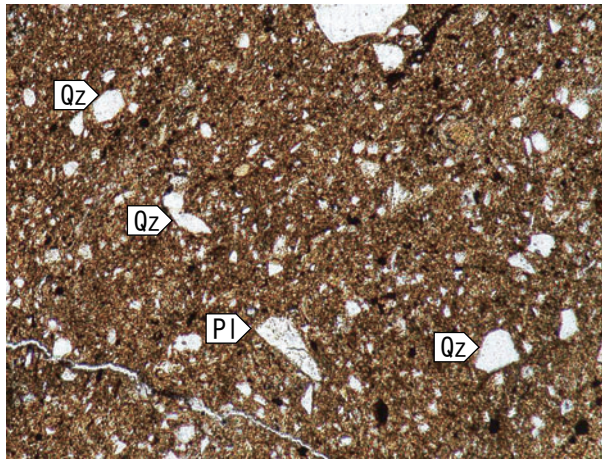
3. 試料番号3 岸岡山皿遺跡

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Che:チャート. Tf:凝灰岩. P-Qz:多結晶石英.  
 Vg:火山ガラス.

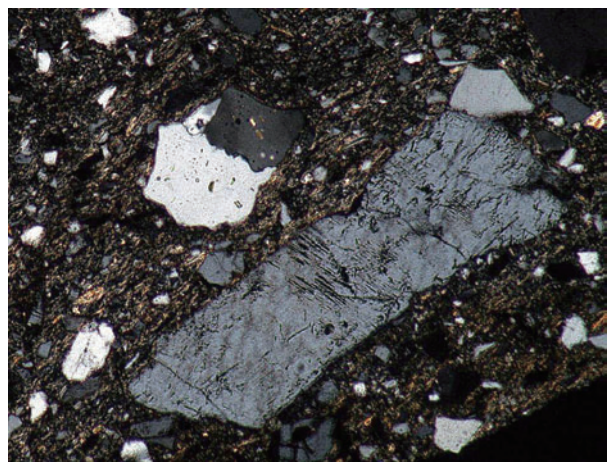
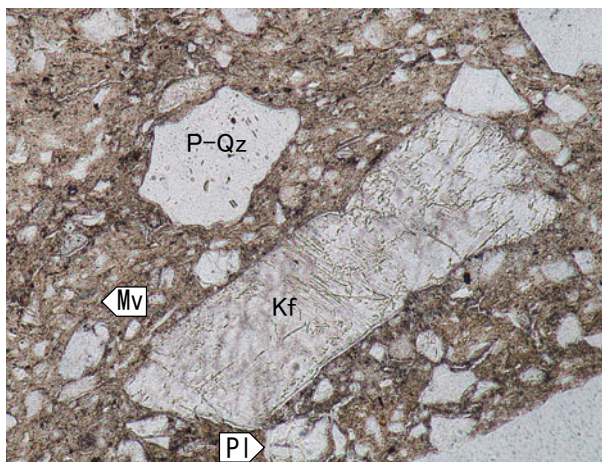
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

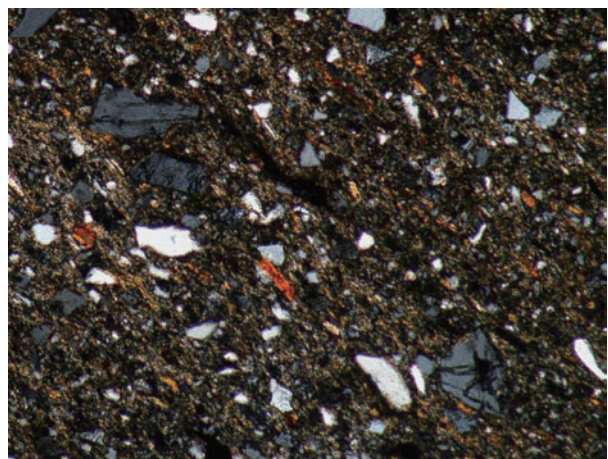
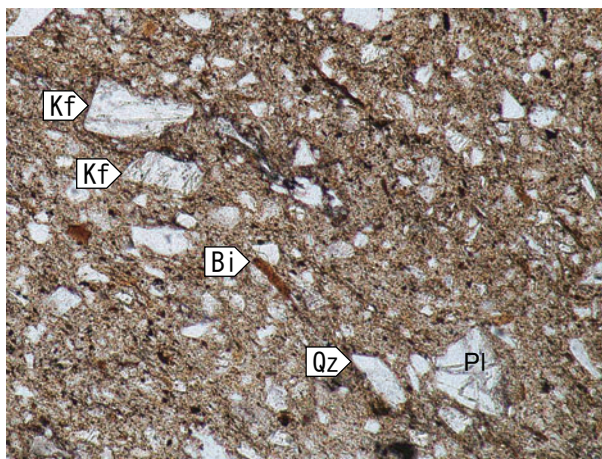




4.試料番号4 天王遺跡



5.試料番号5 十宮古里遺跡

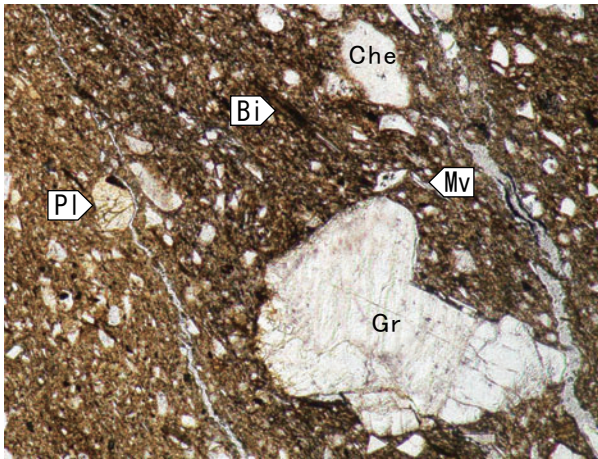


6.試料番号6 磐城山遺跡

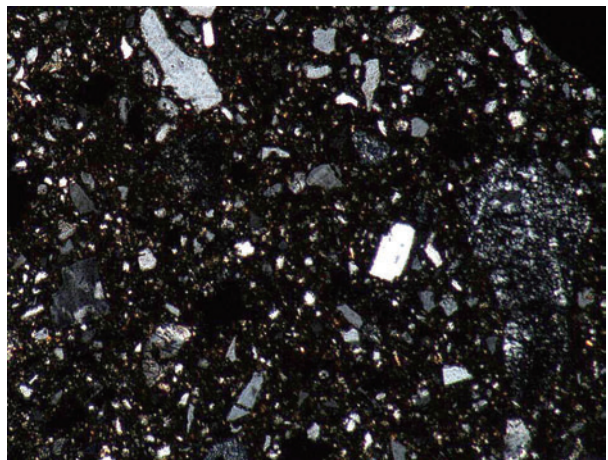
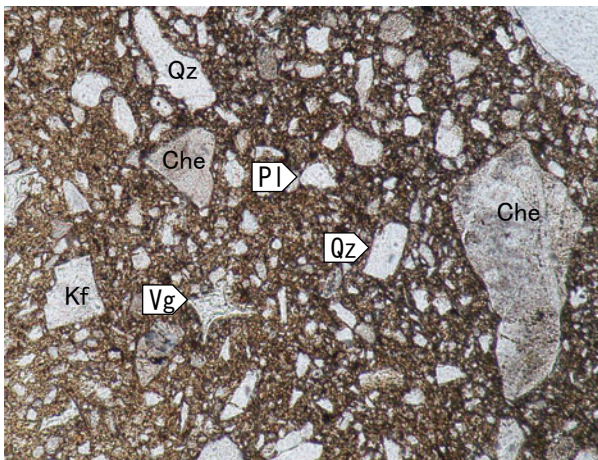
Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Bi:黒雲母. Mv:白雲母. P-Qz:多結晶石英.  
 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

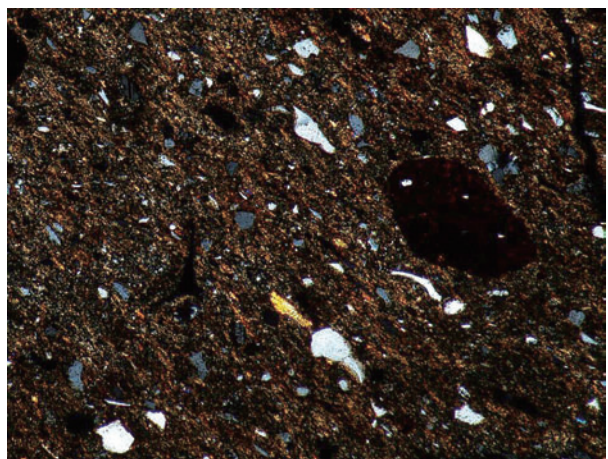
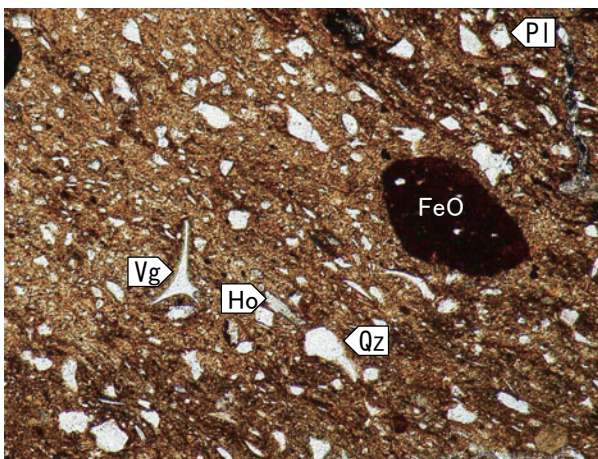




7.試料番号7 南山遺跡




8.試料番号8 南山遺跡



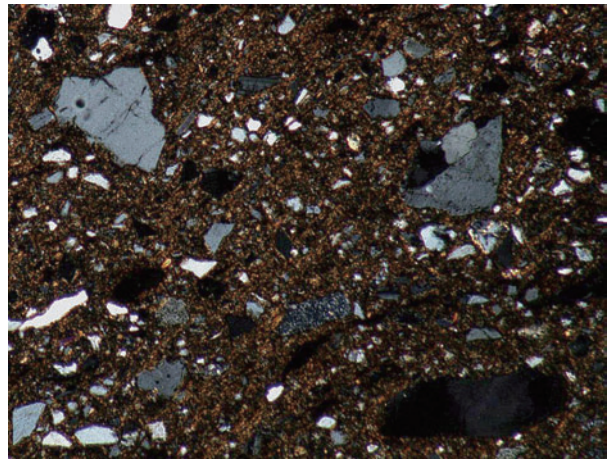
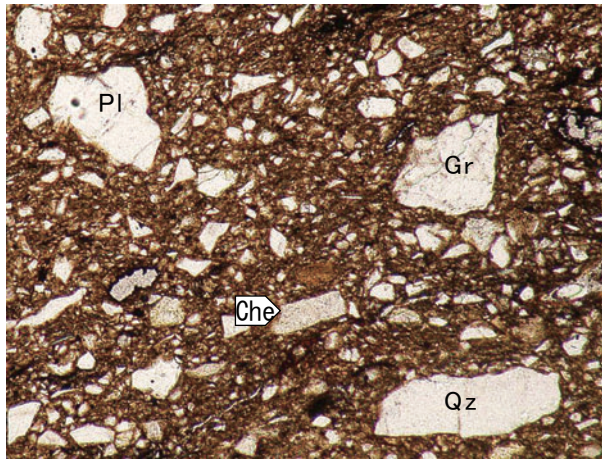
9.試料番号9 一反通遺跡

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Bi:黒雲母. Mv:白雲母.  
 Che:チャート. Gr:花崗岩. Vg:火山ガラス. FeO:酸化鉄.  
 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

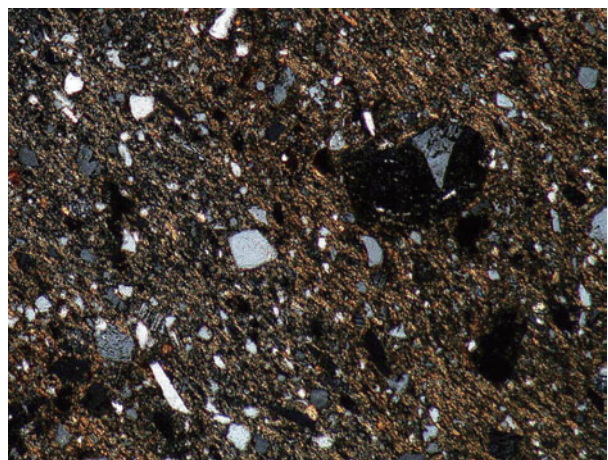
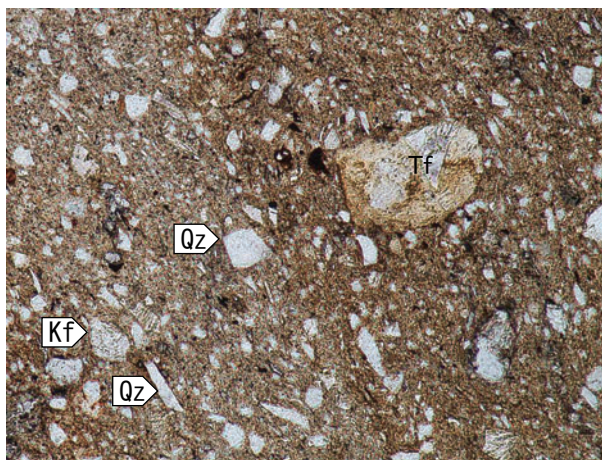
0.5mm







10.試料番号10 沖ノ坂遺跡



11.試料番号11 須賀遺跡

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Che:チャート. Tf:凝灰岩. Gr:花崗岩.  
 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm



Tab.4 報告書抄録

報告書抄録								
ふりがな		あかごういせきはつくつちょうさほうこくしよ						
書名		赤郷遺跡発掘調査報告書						
編著者名		新田 剛						
編集機関		鈴鹿市考古博物館						
所在地		〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224番地						
発行年月日		西暦2011年2月28日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東径	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
赤郷遺跡	三重県鈴鹿市 秋永町字赤郷 1823番2外	24207	598	34°	136°	19950203	269.8㎡	道路建設
				49′ 2″	32′ 49″	～ 19950418		
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
集落	弥生時代 古墳時代	溝		弥生土器・土師器・須 恵器		弥生時代後期～古墳時代前期の環 濠の一部と思われる溝が検出され た。		

---

### 赤郷遺跡発掘調査報告書

---

発行日 2011年2月28日

編集・発行 鈴鹿市考古博物館

〒513-0013

三重県鈴鹿市国分町224番地

TEL 059 (374) 1994

FAX 059 (374) 0986

e-mail : kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp

URL : <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum>

---

